

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 川 村 大



学位申請者 ヨカ・サーニャ（JOKA Sanja）

論 文 名 セルビア語における対格名詞と動詞との組み合わせをめぐって

【審査の結果】

本論文は、奥田靖雄（1968-72）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（以下「奥田論文」と略称）に示された考え方にのっとり、セルビア語における前置詞を伴わない対格名詞（代名詞・数詞を含む。論文中では「対格の名詞的な単位」と呼ぶが、以下ただ「対格名詞」とする）と動詞との組み合わせの体系的な分析・記述を試みたものである。長大な奥田論文の内容を十分に理解し、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせを奥田論文の枠組みに準じて34のタイプに分類、タイプ相互の移行関係を示す。また、日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせと対照させ、その異同を明らかにしている。本研究の研究史的位置づけがあまり明確でない点や、奥田論文のかなり正確な理解にもとづいてセルビア語の事実を分析している一方、奥田による日本語の分析の成果からあまり出ていない感がある点など、問題も無くはないが、着実・堅実な論考であり、セルビア語文法としても、日本語学における文法学上の成果を他言語に適用する試みとしても一定の新規性が認められる。よって、審査委員全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。

なお、審査委員会は川村大を主査とし、本学の早津恵美子教授・鈴木智美教授・花蘭悟准教授、学外の中澤英彦氏（本学名誉教授・ロシア語学）を副査とする5名で構成された。

【論文の概要】

教科研文法における連語論の代表的論考である奥田論文は、文中のヲ格名詞と述語動詞の組み合わせが語や文と並ぶ言語的単位（「連語」）をなすという主張に立ち、ヲ格名詞と述語動詞それぞれの意味的類型（後に「カテゴリーカルな意味」と呼ばれるもの）や共起する他の成分（二格名詞など）を参照しつつ32のタイプに分類している。連語の文法的性格に関する奥田氏の主張には各種の疑問が提示されているものの、当該論考は文中ヲ格名詞の体系的分類の例として今日でも参照されることが多い。一方、セルビア語文法では述語動詞の語彙的意味に従った対格名詞の類型化の例はあるものの、対格名詞そのものの意味タイプや他の共起成分を参照した、つまり、言語現象に徹底して依拠した分類はいまだになされていないというのが論文筆者の認識である。本論文はそのような現状理解のもと、奥田論文の枠組みを参照しつつ、セルビア語の対格名詞と動詞の組み合わせの類型化を図ったものである。

本論文は3部18章からなる。

「第一部 序論」は5章からなる。第一章では研究動機と目的が示される。第二章では論文の構成・略号のリスト・日本語訳の方針を示す。第三章はセルビア語の概要と文法の概略（品詞と構文）である。第四章では当該分野のセルビア語学における先行研究である Gortan-Premk (1971) と Arsenijević (2012) をやや詳しく示したうえでその問題点を指摘し、その後奥田論文の概要を示して本論文との関係について述べる（詳細については後述）。第5章では使用する資料と分析方法について概略を述べる。

筆者がセルビア語学における主要な先行研究として取り上げる Gortan-Premk (1971) と Arsenijević (2012) は、ともに文中対格名詞の用法について豊富な情報を示している。このうち、Gortan-Premk (1971) は奥田氏と同様 *Виноградов* の連語に関する論考を参照している点で研究史上も興味深い。筆者によれば、Gortan-Premk (1971) は対格名詞句の意味分類にあたってほぼ述語動詞の語彙的意味のみに注目している点が不十分であり、対格名詞自体の語彙的な意味や共起する他の成分に注目することで、ある特定の意味・機能を備えた対格名詞が現れる条件を一般化できるのだとする。例えば、Gortan-Premk (1971) は「お世辞を言う」「苦情を言う」などの例を「家を建てる」「ケーキを作る」などと同じ「生産的関係を表す句」に含めているが、前者は材料を表す要素を要求しないという点で後者とは異なり、別の類型とするべきであるという。また、Arsenijević (2012) は、(プロトタイプの意味カテゴリーである) 他動性の議論の一環として対格名詞について議論していながら、考察対象を伝統的な直接目的語に(截然と)限定している。また、分類の基準を明示的に示していない点が問題であると指摘する。具体的には、動詞 *pretneti* が共起する対格名詞の種類によって「移動させる」「伝達する」「感染させる」などの事態を表すのに、それらを区別せず同じ意味カテゴリーに収めること、また、分類をどこまで詳細に進めるかにあたってその基準を明示的に示さないために、分類の要否について疑問が残ることなどを挙げている。

筆者が主に依拠するのは奥田論文である。奥田論文では、文中のヲ格名詞が広義の目的語にあたるもの(「対象的な結びつき」と移動に関係する空間等を表すもの(「状況的な結びつき」))に大別し、前者をさらに「対象への働きかけ」とそれ以外の「所有のむすびつき」「心理的なかわり」に分類、各々について述語動詞やヲ格名詞の意味のタイプ、さらに共起する成分が何であることを考慮しつつ下位類を立てる。結果として合計32のタイプを立てる。また、ヲ格名詞が具体的な「物」であるか、意志を有する「人」であるか「事」であるかの違いや、共起する他の成分の有無に従って下位類同士の移行関係が見られることを豊富に指摘している。筆者はこうした奥田論文の方法論を基本的に継承しつつ、2点において奥田論文と異なる方針を採用するという。第一に、主格名詞をも考慮に入れるということ。これはセルビア語に *Boli ga noga.* (「(痛める・彼を・足が) 彼は足が痛い」) や *Boli ga njena hladnoća* (「(痛める・彼を・彼女の冷たさが) 彼は彼女の冷たい態度で傷つく」) のようなタイプの組み合わせがあり(それぞれ「生理的な状態」「心理的な状態」と呼ばれる)、VOS という特異な語順をとるとともに、文の成分と文法的意味(意味役割)との対応関係が「主語である主格名詞が[原因]、目的語である対格名詞が[主体]」という特異なものであって、タイプの定義にあたって主格名詞への言及が不可欠であるこ

とによる。第二に、早津（2016）等の主張に従い、奥田論文では必ずしも十分に述べられていない「語彙的な意味」「カテゴリカルな意味」「文法的な意味」の概念を導入するという点である。

「第二部 本論（分析結果）」は10章から成る。第六章ではセルビア語における文中対格名詞の現れ方に5つの異なるパターンがあることを指摘する。

- ・本質的な対象的な関係を表す組み合わせ（6.1 これが基本的であるとする）
- ・二重対格（6.2）
- ・人の「生理的な状態」と「心理的な状態」を表す組み合わせ（6.3）
- ・組み合わせについて補充的な情報を与える場合（6.4）
- ・事柄について補足的な情報を与える場合（6.5）

特に二重対格構文があること（上記の第2の点）、語順等が特異な「生理的な状態」「心理的な状態」と呼ぶ組み合わせがあること（第3点）、動作対象ではなくて述語動詞に数量的な情報を補充するものがあること（第4点）は日本語と異なるということを指摘する。

次いで、「第七章 物に対する働きかけ」（6類）「第八章 人に対する働きかけ」（7類）「第九章 事に対する働きかけ」（2類）「第十章 所有関係」（2類）「第十一章 心理的なかかわり」（4種9類）「第十二章 状況的な組み合わせ」（2種6類）「第十三章 外的状況を表す対格名詞的な単位」（2類）では具体的な下位分類（34類）を示す。

物に対する働きかけ：「変化」「付着」「除去」「移動」「接触」「生産」

人に対する働きかけ：「生理的な変化」「生理的な状態」「心理的な変化」「心理的な状態」「空間的な位置変化」「社会的場面での人への働きかけ」

事に対する働きかけ：「事の『変化』」「事の『出現』」

所有関係：「物持ち」「授受」

心理的なかかわり：「認識の組み合わせ」（「感性的な組み合わせ」「知的な組み合わせ」「発見の組み合わせ」）

「伝達の組み合わせ」（「通達」「教育目的の内容伝達」）

「態度を表す組み合わせ」（「感情的な態度の組み合わせ」「知的な態度の組み合わせ」「表現的な態度の組み合わせ」）

「モーダルな態度を表す組み合わせ」（「要求的な組み合わせ」「意図的な組み合わせ」）

状況的な組み合わせ：「状況的空間・時間を表す組み合わせ」（「空間を表す組み合わせ」「時間を表す組み合わせ」）

「状況的量を表す組み合わせ」（「狭義の量を表す組み合わせ」

「物事の重さ、物事の価値・値段を表す組み合わせ」「時間的量を表す組み合わせ」「空間の量を表す組み合わせ」）

外的状況を表す対格名詞的な単位：（「外的時間・期間を表す対格名詞的な単位」「回数・頻度を表す名詞的な単位」）

第十四章ではカテゴリー間の相互移行の関係を5つのパターンに分けて示す。

- ・構造の拡大 (14.1)
- ・組み合わせる要素の意味的な性質の変化 (14.2)
- ・意味的な分類がし難い対格名詞と動詞との組み合わせ (14.3)
- ・構文的なコンタミネーション (14.4)
- ・組み合わせる要素の特殊化による慣用句化 (14.5)

第十五章は日本語とセルビア語との異同を示す。共通点として、具体的な物や人への働きかけの場合を基本的用法とする点、また、所有関係を表す点を挙げる（ただし、セルビア語では「所有関係」で表し得る事態の種類が日本語よりも広い）。相違点として以下を列挙する。

- ・セルビア語では思考を表す動詞が対格名詞と共起する例もあるが、razmišljati（「考える」）misliti（「思う」）を中心に「o（前置詞「～について」）+所格名詞」と共起する場合のほうが多い。（15.2.1）
- ・セルビア語では通達を表す動詞が対格名詞と共起する場合もあるが、多くの場合は「o（前置詞「～について」）+所格名詞」と共起する。（15.2.2）
- ・セルビア語では待遇関係を表す動詞のうち、pozdraviti（「挨拶する」）stesti（「会う」）などが対格名詞と共起する。（日本語では二格名詞と共起する）（15.2.3）
- ・セルビア語では状況的な関係を表す場合、対格名詞と共起しない場合がある。移動経路の場合は具格名詞、何かの上を移動する場合は「iznad（前置詞「～の上」）+具格名詞」、下方への移動の場合は「niz（前置詞「～の下」）+対格・具格名詞」、離脱の場合は「iz/od（前置詞「～から」）+属格名詞」のほうが多い。（15.2.4）
- ・セルビア語では物の量や重さ、価値・値段、回数を数詞や単位名の対格で表す。（15.2.4.3、15.2.5）
- ・セルビア語には「生理的な状態」「心理的な状態」という組み合わせ（前述）がある。（15.2.6）
- ・セルビア語では二重対格を許す（前述）。（15.2.7）

「第三部 結論と今後の課題」としての第十六章では、第二部の内容を再度まとめたうえで今後の課題を3点にわたって示す。

【講評】

事例に基づいてセルビア語の「対格名詞+述語動詞」を類型化し、その網羅的な記述を果たした労作である。その際、単に分類したにとどまらず、類型と類型の間の移行関係を詳細に記述し、またそれらを5つに類型化して見せた点にも全面的な記述への強い志向が認められる。日本語の「ヲ格名詞+述語動詞」との異同を示している点にも一定の有効性が認められる。

分類に際して奥田論文の枠組みを採用したという点も様々な点で有意義である。文中の対格名詞成分のような、表す意味が複雑多様な形式の用法を過不足なく記述するにはどうしたらよいか。このことは日本語やセルビア語に限らずどの言語でも課題の一つである。奥田論文の提示する方法論はそうした課題に対して一定の有効性を持っている。述語動詞とそれに従属するヲ格名詞の組み合わせの膨大な実例から、述語動詞・ヲ格名詞それぞれについて、複数の動詞・名詞に共通する意味的側面（「カテゴリーカルな意味」）を抽出し、文中の他の共起成分（ニ格名詞、引用句、副詞類等々）の出現傾向をも参照して文型の類型化を図っていく。その際、意味を根拠にするからといって決して「言語外事実の分類」に陥っているわけではない。あくまで各言語において慣習化された「カテゴリーカルな意味」を根拠とする点で言語事実に依拠した分類たりうるのである。奥田氏の連語論に対しては、その主たる理論的主張——およそ2つの語の組み合わせである「論語」は語や文と並ぶ（意味の対応物である）言語的単位である——に対する疑義を含め、様々な疑問・批判が寄せられてもいるのだが、少なくとも上に示した奥田論文の方法論は日本語を超えて諸言語の文法現象の記述に応用しうる有効性を持つと言える。本論文は奥田論文のそのような有効性を認め、長大かつ難解な奥田論文の内容を十分に理解した上で、セルビア語の対格名詞の用法記述に応用したものである。

このように本論文は、セルビア語の対格名詞記述に新生面を開いたものであると位置づけられるのみならず、日本語のヲ格名詞記述との共通枠を用いているという点で、日本語セルビア語対照研究、セルビア語母語話者に対する日本語教育、日本語母語話者に対するセルビア語教育にも一定の有効性を有するものであると言える（筆者はこの点について自覚的である）。

一方で、以下のような諸問題もまた指摘された。

- (1) 先行研究に対する本論文の研究史的意義がどこにあるか、あまり明示的に述べられていない。また本論文に対する先行研究 Gortan-Premk (1971) と Arsenijević (2012) の研究史的位置についても明晰な記述がない。
- (2) 奥田論文のかなり正確な理解にもとづいてセルビア語の事実を分析している一方、それだけに奥田による日本語の分析の成果からあまり出ていない感がある
- (3) 文中対格名詞に目的語であるものとそうでないものがあるとすれば、述語動詞が他動詞であるか否かの判定について何らかのテスト（受動態化できるか否か）を導入するべきである。
- (4) 本文中の用語や例文に対するグロスの付け方にばらつきがある。

ただ、これら個々の問題点も本論文全体の価値を損なうものではないという認識で審査委員の認識は一致している。

2020年2月20日に実施された最終試験においては、本論文が基本的に好論であることを前提としつつも、各審査委員から様々な問題点の指摘がなされた。著者の返答は、審査委員の指摘を十分に認識し今後の課題として受け入れつつ、自分の基本的立場はそれとして率直に述べるものであった。

【総合評価】

学位請求論文の内容、最終試験における応答などから総合的に判断した結果、審査委員は全員一致で、本研究が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。

以上